

シンポジウム：幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響～日・中・韓比較～

★シンポジスト

内田 伸子

(Uchida Nobuko)



お茶の水女子大学教授

学術博士。第 20 期日本学術会議会員。お茶の水女子大学教授。専門分野は発達心理学・認知心理学。

1946 年群馬県生まれ。1968 年お茶の水女子大学文教育学部卒業、1970 年同大学院人文科学研究科修了、学術博士。1970 年一橋大学社会学部助手、1976 年お茶の水女子大学文教育学部専任講師、助教授(1980)、教授(1990)を経て 1998 年同大学院人間文化研究科教授。2004 年より文教育学部長、2005 年 4 月より 2009 年 3 月まで同大学副学長を務める。日本発達心理学会常任理事、日本教育心理学会常任理事など。

主要著書に『子どもの文章：書くこと考えること』（東京大学出版会、1990）、『まごころの保育—堀合文子のことばと実践に学ぶ—』（小学館、1990）、『発達心理学：ことばの獲得と教育』（岩波書店、1999）、『異文化に暮らす子どもたち』（監修著、2004）、『心理学—こころの不思議を解き明かす—』（光生館、2005）『わかりやすい乳幼児心理学』（ミネルヴァ書房、編著、2008）（サイエンス社、2008）、『子育てに「もう遅い」はありません』（成美堂出版、2008）、『幼児心理学への招待—子どもの世界づくり』ほか多数。

受賞歴：城戸奨励賞（日本教育心理学会、1978）、読書科学研究奨励賞（日本読書学会、1980）、読書科学賞（日本読書学会、2000）、磁気共鳴医学会優秀論文賞（日本磁気共鳴医学会、2006）。

李 基淑

(Lee Ki Sook)



梨花女子大学教授

教育学博士。梨花女子大学教授、梨花女子大学付属・梨花子ども研究院院長。

梨花女子大学幼児教育学科を卒業し、アメリカ George Peabody College for Teachers で修士及び博士の学位を取得。韓国幼児教育学会会長と世界幼児教育機構(OMEP)韓国会長を歴任し、現在は環太平洋幼児教育学会(PECERA)韓国会長と大韓子ども教育協会(ACEI)韓国会長を務める。

幼児教育課程、幼児教育プログラムに関する著書多数。韓国、中国、日本 3 カ国の幼児教育に関する研究も多数ある。教育科学技術部の政策諮問委員として韓国幼児教育学科保育政策に関する重要な役割を担っている。

受賞経歴としては国務総理賞(2003 年)、韓国幼児教育課程研究開発に関する功勞で教育部長官表彰を 2 回授与された。

周 念麗

(Zhou Nianli)



華東師範大学副教授

華東師範大学副教授。
心理学博士。

1995年日本お茶の水女子大学心理学部卒業、学士取得。

1998年日本東京大学大学院教育修士の学位取得。

2003年中国華東師範大学理学博士の学位取得。

2004年6-12月 米国 Arizona State University 客員研究員として乳幼児の情緒発達研究を行った。

2006年5月-2007年3月 日本国際交流基金フェローとして、名古屋大学で統合保育について研究した。

現在 華東師範大学就学前教育学部 心理研究室主任 副教授。

研究領域：児童発達心理、親子関係、統合保育

主な研究業績：	就学前児童の発達心理学	編著
	就学前児童の心理健康	編著
	自閉症児の社会認知	学術著作
	特殊児童の統合保育における比較と研究	学術著作
	スマートなベビーを育てる	著

研究論文 約20本、児童発達に関する論文約60本。

★オーガナイザー

榊原 洋一

(Sakakihara Yoichi)



お茶の水女子大学教授

医学博士。お茶の水女子大学教授。日本子ども学会常任理事。専門は小児神経学、発達神経学特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。趣味は登山、音楽鑑賞、二男一女の父。

1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒。東京大学小児科講師を経て、現在お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授。

主な著書：「オムツをしたサル」（講談社）、「集中できない子どもたち」（小学館）、「多動性障害児」（講談社+α新書）、「アスペルガー症候群と学習障害」（講談社+α新書）、「ADHDの医学」（学研）、「はじめての育児百科」（小学館）、「Dr.サカキハラのADHDの医学」（学研）、「子どもの脳の発達 臨界期・敏感期」（講談社+α新書）など。

※ 本調査はお茶の水女子大学・梨花女子大学・華東師範大学・ベネッセ次世代育成研究所の共同研究として実施された。

★調査結果

<日本>

幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響

—経済格差、しつけスタイルとの関連—

[日韓中越蒙国際比較調査—2008年 日本の調査結果]

幼児期のリテラシー（読み書き能力）の習得は子どもの認知発達と強い関連がある。また語彙能力は知能発達や学力適応度の指標になることが明らかにされてきた（内田, 1989; 2007; 東他, 1995）。

リテラシー習得に社会文化的要因はどのような影響を及ぼしているかについて明らかにする目的で、お茶の水女子大学グローバル COE「格差センシティブな人間発達科学の創成拠点」ではリテラシー習得の日韓中越蒙国際比較調査を推進中である。2008年度の日本の調査結果を報告する。

3歳児 828名、4歳児 956名、5歳児 950名合計 2734名を対象にした個別の臨床面接を実施し、リテラシー、語彙、アルファベットの読みの習得度、文字の道具的価値への気づきを調べた。さらに、対象児の保護者 1780名、対象児が通園している保育所・幼稚園の保育者 100名を対象にしてアンケート調査を実施した。

幼児のリテラシー習得と家庭環境・保育環境との関連についての主な結果は次の通りである。

第1に、リテラシーの習得については3歳児、4歳児までは、経済格差要因（家庭の経済格差、教育投資額差、親の学歴、家庭の蔵書数、しつけスタイル）の影響を受けるが、5歳児への経済格差要因の影響は減少する。

第2に、語彙能力は加齢に伴い、経済格差やしつけスタイル要因の影響が強くなる。

第3に、家庭環境（経済格差やしつけスタイル）と保育形態（一斉保育か子ども中心主義保育か）には交互作用があり、保育形態は5歳児においてリテラシー習得に経済格差要因を相殺する働きをもつことが明らかになった。

第4に、しつけスタイルは「共有型」（ふれあいを重視し、子どもとの体験を享受・共有する）・「強制型」（大人中心のトップダウンのしつけや力のしつけ）・「子負担型」（子育て負担感が大きく、育児不安か放任に二極化）に分かれ、強制型は低所得層に多く、共有型は高所得層に多い。子負担型は高所得層、低所得層に共に多く、中間の所得層では少ないV字型に分布することが明らかになった。

大人が子どもと対等な関係でふれあいを重視し、体験を共有することを楽しむような関わりを通して、子どもが主体性をもって環境探索を行い、内発的な知的好奇心を発揮していけることが示唆された。リテラシー習得や語彙能力の拡大によい影響をもたらしていることがうかがわれた。

第5に、共有型しつけスタイルはSDQ尺度の向社会性の発達と強い関係があることが明らかになった。子どもと対等に楽しい経験を共有するような親の関わりが将来のよい対人関係やコミュニケーション能力の発達に資することが期待される。

<韓国>

幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響

[日韓中越蒙国際比較調査－2009年 韓国の調査結果]

幼児のリテラシー能力の発達は親と保育者の重要な関心事の一つである。これは韓国だけでなく、日本、中国においても同様であろう。特に、韓国の親は子どもの早期学習と関連して、読み書き能力に多くの関心を注ぎ、現在は早くから子どもの読み書き発達に関する早期教育が行われている。これは、読み書きに関するリテラシー能力の発達が小学校での学習達成度に影響を及ぼし、全ての教科がこのような読み書き能力と関連しているからであろう。読み書き能力が学習の基礎となることを考慮すると、早くから読み書きさせようとする親の気持ちを一概に非難できないところもあろう。幼児期のリテラシー能力を向上させる方法に慣れていない親は、ドリルに頼り、反復される学習だけを強調しかねない。また、保育者も読み書きに関する明確な知識を持たず、すなわち、幼児にいつ、どのように教えればよいのかに関する明確な教育観を持たないまま幼児に読み書きを教えていることもある。

幼児のリテラシー能力の発達は幼児個人と関わる多様な要因と、幼児が生活している家庭及び、幼児教育機関など、関連要因によって影響を受ける。一般に、幼児の読み書き能力に及ぼす幼児個人に関連する要因として、幼児の年齢、性別、社会的情緒的能力が挙げられ、家庭環境要因としては家庭の社会経済的水準、兄弟関係、親の養育態度及び信念が挙げられ、教育環境要因としては保育者、クラスの規模と教授法などが挙げられる。そこで、本研究では幼児の個人的要因、家庭環境要因、教育環境要因の三つの要因を考慮して幼児の読み書き能力の発達に及ぼす影響を検討し、さらに、韓国・日本・中国の3カ国の幼児を対象に読み書き能力にこれらの要因がどう関わるのかを比較検討する。

本研究は、ソウル、京畿、仁川地域を中心に国公立・市立幼稚園と区立・市立保育園(44ヶ所)の幼児、保育者、保護者を対象にした。幼児向けの調査、保護者向け質問紙は3歳児(442名)、4歳児(604名)、5歳児(578名)を対象に合計1624名の検査用紙と質問紙を回収して分析した。本研究の結果、読み書き能力の発達と関連のある全体の傾向は以下のとおりである。

第1に、幼児の年齢、性別、家庭所得水準によってリテラシーの習得に差があるかを調べた結果、幼児の年齢が上がるにつれリテラシー得点が上がリ、全ての年齢で差が出た。性別によってもリテラシー得点に差があり、女兒は男児より得点が高かった。しかし、性別の違いは加齢に従い、小さくなる傾向があった。英語得点については性別による差はみられなかった。また、家庭の所得によって幼児のリテラシー得点に違いがあることが判明したが、加齢に従って高所得集団と低所得集団の差は小さくなる傾向があった。しかし、英語得点では年齢が上がっても差が維持され、5歳に所得水準による違いが確認された。

第2に、幼児の年齢によるリテラシーの下位要因の相関は低年齢の方でより明確な相関が確認された。すなわち、3歳児では読み、書き、語彙間の相関が顕著に現れる一方、4歳児では弱い相関、5歳児では読み得点と語彙得点間で弱い正の相関があった。

第3に、家庭の所得及び環境によって幼児のリテラシーに違いがあるのかを検討した結果、家庭の

所得によって親の日常生活スタイル、所蔵図書数、子どもへの進学希望範囲、私教育実施比率に差があることが確認された。これと関連して教育投資額が高いほど、幼児のリテラシー関連得点が高いことが分かった。これは、家庭の所得が高いほど、教育投資額も有意に増加するといった結果と関連があり、高所得家庭の高い教育投資額が低年齢幼児のリテラシー能力に影響していると解釈できる。家庭の養育環境における所得と教育への投資は初期には影響するが、幼児の年齢が上がるにつれ、その影響力は低くなっていることが分かる。

第4に、幼児のリテラシー習得と関連して親の養育態度の要因を分析した結果、[共有型](子どもとの相互作用を多くし、一緒にいるのを楽しみ、子どもの意思を尊重する意思疎通方式を好む)、[指示型](子どもとの疎通が一方的で、子どもの意思よりは決まった指示と規則が優先される)、[犠牲型](親が子どもにすべてを合わせてあげるもので、親の希望をあきらめて子どもの要求に合わせる)、[統制型](子どもを統制するもので、体罰を駆使する)などの4つの類型が抽出された。所得による養育態度を検討した結果、高所得集団では[共有型]が多く、低所得集団では[指示型]が多かった。[犠牲型]、[統制型]は高所得集団と低所得集団ともに現れ、所得による差は見られなかった。

家庭所得による幼児の社会的能力の違いを検討した結果、高所得集団で向社会的得点が高いことが明らかになった。また、親の養育態度得点を比較した結果、高所得集団で[共有型]の養育点数の平均が高く、低所得集団では[指示型]の養育得点の平均が高かった。親の養育態度による子どもの社会的能力は[共有型]でもっとも多く、以降[統制型]、[犠牲型]、[指示型]の順で現れ、相互作用的かつ双方向的な意思疎通方式を行う[共有型]の養育が向社会的な子どもの気質に影響を与えることがうかがえる。従って、所得水準と関係なく、親の養育態度が相互作用的で双方向的な[共有型]になるように親が努力するとき、子どものより肯定的な社会的傾向が発達していくことが示された。

幼児のリテラシー習得及び発達に関連した研究は、幼児は成人のように読み書きができる以前であっても読み書きを学ぶ過程にあり、学校に行く前から既にリテラシーに関する多くを学んでいると主張する(Ferreiro & Teberosky, 1992; Goodman, 1980; Teale & Sulzby, 1986)。このような観点からすると、読み書き能力は認知的で社会的な活動であり、家庭から始まるのである。従って、幼児が日常生活で体験するリテラシー環境を把握し、このような環境が幼児のリテラシー習得及び発達に及ぼす影響を研究することは非常に重要である。本研究は幼児のリテラシー習得及び発達に影響する要因を検討したもので、究極的には家庭と集団保育の場、両方で活用できる方法を模索し、今後、日韓中3か国間の比較により、興味深い知見が得られることを期待する。

<中国>

幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響

—経済格差の違いを巡って—

[日韓中国際比較調査—2009年 中国の調査結果]

内田(1989; 2007)、東他(1995)の研究結果によると、幼児期のリテラシー（読み書き能力）習得は子どもの認知発達と強い関連がみられ、語彙能力は知能発達や学力適応度を予測する指標となっていることは、幼児期のリテラシー発達の重要性を示唆した。

中国では、幼児のリテラシー発達について、まだほとんど調査が行われていないのが現状である。先行研究によると、経済的に豊かな家庭ほど、子どもの認知能力が高いことから、社会全体が激しく変化し、特に貧富の差も広がりつつある中国の子どもたちの読み書き能力の実態を把握することは非常に重要である。また、中国で経済改革が行われ、所得の差は保護者の育児スタイル、また幼児のリテラシー習得にどのような影響を与えているのかを調べるために、お茶の水女子大学内田伸子教授がリーダーとなっている「リテラシー習得の日韓中越蒙国際比較調査」に参加し、2009年4月から7月にかけて上海で調査を行った。ここでその結果を報告する。

一、調査の概況

1. 被験者

上海市の保育所（1つ）と幼稚園（計20ヶ所、私立2、公立18）の園児1779名（3歳児596名、4歳児615名、5歳児568名）、保護者1040名及び保育士118名。経済状況における差異を考慮し、親の所得に応じて、高い経済レベル、中間レベル及び低いレベルにある3つの行政区からそれぞれ7つの園/所を選んだ。

2. 調査内容

3～5歳の幼児に個別の対面調査を実施し、子どもたちの読み、書き、語彙、アルファベット読みの習得度、文字の道具的価値への気づきなどについて調べた。対象児の保護者および在籍している保育所・幼稚園の保育者に対してアンケート調査を実施した。

二、調査結果

1. 幼児のリテラシーの実態に関する調査結果

1) 年齢差

漢字の読み、書き、語彙、しりとり及び英語のアルファベット平均得点は、年齢が上がるとともに上昇し、年齢による差は顕著であった。5歳児において、各方面の能力が飛躍的に上昇する傾向が見られた。これは子どもの発達上の要因とも関連しているが、中国で非常に重視されている幼稚園児の入学レディネスに関連されているかもしれない。

2) 性差

漢字の読み、書き、語彙、しりとり及び英語のアルファベット認知の平均得点のいずれにおいても、男児と女児の間に有意な差はみられなかった。読みと英語のアルファベット認知について、男児のほうは女児よりもやや有意に高いが、他の能力においては女児のほうの平均得点が男児より高かった。中国では「男女平等」が提唱されてから既に60年あまりが経ち、都市部では子どもの性別に問わずきちんと教育を受けさせることは当たり前になっている。教育機会平等という社会的な要因以外に、女児が男児に比べて得点が高い理由として、女子のほうがおとなしく指示に従い、勉強するときもより集中できるなど他にも考えられる原因はいくつかある。

3) 幼児のリテラシー能力の間の関連

幼児のリテラシー能力の間にどのような関連があるかについて検討した。

まず、漢字の書き得点に関しては、どの年齢においても、書き得点は書き順との間に有意な弱い正の相関がみられた ($r = .266^{**}, 221^{**}, 218^{**}$)。

5歳児を除いて、3歳児と4歳児は書き得点と確認回数も正の相関が認められた。また、4歳児を除いて、3歳児と5歳児では書き得点書き順と言語補助、確認回数との間に正相関が確認された。さらに、三つの年齢において、いずれも書き得点は読み得点、しりとり得点との間に有意な正相関があった。

また、3、4歳児グループにおいて書き得点と読み得点の間に強い正の相関が見られたが、5歳児の場合、読み得点と語彙得点の間に正の強い相関があった。

2. 経済格差による保護者の育児行動としつけスタイルの差異

今回の調査のもう一つの目的は、経済の格差が「中国ママ」（教育に対して極めて熱心である中国の母親のことを意味している。最近流行語となっている）のしつけスタイルにどのような影響を与えているのかを解明することで、その結果は以下の通りである。

第一に、子どもを習い事/塾（「興味班」）に通わせることの比較。低所得層と高所得層の間に有意な差がみられ、低所得層の保護者は子どもをより多く（1つか2つ）の習い事、特に外国語系の塾に通わせることが分かった。就学前準備のために子どもを塾に通わせる低所得層の保護者は高所得層保護者の倍となった。この結果から、低所得層の保護者は高所得層の保護者よりも子どもに外国語を習わせる熱意がより強いことが窺える。

第二に、教育投資額と文字を教えることへの考え方に関する比較。低所得層の保護者に比べて、高所得層の保護者は子どもに絵本、物語、漫画、学習雑誌、図鑑の5つの教育に関する書物を買って与える数はより多かった。また高所得層保護者は子どもに文字を教えるための考え方として、「文字の豊かな環境におく」、「子どもが興味があるときに教える」という項目の選択率も低所得層より有意に多かった。所得の高い家庭は経済的にゆとりがあるため、より多くの書籍を購入することが可能であり、低所得の家庭の子どもに比べ、高所得の家庭の子どもはより文字の豊かな環境にいられることが推測できる。

第三に、保護者のしつけスタイルの比較。保護者のしつけスタイルについて因子分析を行った結果、「共有調和」、「厳格」と「子ども中心」という3因子を抽出した。因子得点により群分けした結果、「共有調

和」タイプ、「共有厳格」タイプと「疎遠無視」タイプという3つのグループとなった。「共有調和」タイプは親子間では感情の共有ができ、協和的な関係を持っていることを指す。「共有厳格」タイプは、「共有調和」と「厳格」の得点がともに高く、即ち、子どもと感情の共有ができる一方、子どもを厳しくしつけるタイプのことを指す。「疎遠無視」タイプは3つの因子得点がすべて低く、親と子どもの間に距離があり、子どもに対して関心が薄いタイプである。

3. 経済格差が幼児のリテラシー得点に及ぼす影響

今回の調査を通して、保護者の所得の差は幼児のリテラシーに影響を及ぼすことが明らかにされた。表2-4に示されたように、高所得層の子どものリテラシー得点は有意に高かった。子どものリテラシー得点は教育投資額、保護者のしつけスタイルと強い相関がみられた。すなわち、親の教育投資額が多ければ多いほど、幼児のリテラシー得点が高いという傾向があった。幼児のリテラシー得点は保護者のしつけスタイルの「共有調和」タイプ、「共有厳格」タイプ、「疎遠無視」タイプの順で低くなっている。

三、展望

幼児のリテラシー発達は発達の要因によって、年齢が上がるに伴い上昇していく傾向が見られたが、保護者のしつけスタイルや教育投資額など社会的な要因もリテラシー得点に影響を与えていて、所得の差が大きく作用していることが明らかになった。

我々は所得の差を埋めることはできないが、今回の調査を通して、心に余裕を持って、子どもとよりよい親子関係を築き、よりよい学習環境を作ることは、子どもの読み書きに関する興味を引き起こすことにプラスに働くという結果を保護者たちに理解してもらうことは意味があるだろう。

表1で示されたように、所得高群には「共有調和」タイプの比率が最も高く、対照的に、「共有厳格」タイプにおいて、所得低群の保護者が占める比率が有意に多かった。両群においてどちらも「疎遠無視」タイプが少なかった。

< 資料 >

表1 保護者の所得としつけタイプの比較

所得	<i>n</i>	共有調和 (%)	共有厳格 (%)	疎遠無視 (%)
高群	458	63%***	29%	8%
低群	507	23%*	66%***	11%

表2 教育資料（書籍）の投与と幼児のリテラシー能力との相関

	絵本			物語			漫画			稽古			図鑑		
	三歳	四歳	五歳	三歳	四歳	五歳	三歳	四歳	五歳	三歳	四歳	五歳	三歳	四歳	五歳
読み 得点	.144*	.166*	.052	.229* *	.086	.156*	-.010	-.081	-.008	.114	.129	.051	.098	.071	.084
書き 得点	.175* *	.021	.044	.139* *	.035	.156*	.021	.026	.022	.072	.084	.023	.050	.039	.060
語彙 得点	.295* *	.132	.198	.280* *	.221	.384	-.120	.250	.333	.198	.181	.159	.274* *	.145	-.134

表3 親のしつけのタイプにおける幼児のリテラシー能力の差の検証

しつけタイプ	読み得点			書き得点		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD
共有調和	371	38.88***	35.75	396	7.26*	2.80
共有厳格	159	37.77	35.70	161	7.02	3.03
疎遠無視	290	34.39	35.73	311	6.88	2.71

表4 親の教育投資額における幼児のリテラシー能力の差の検証

教育投資 額レベル	書き得点			英語得点			読み得点		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD
レベル1	235	6.86	2.73	235	5.03	8.20	235	31.36	34.24
レベル2	293	6.97	2.79	293	6.7	9.72	293	33.92	34.62
レベル3	214	7.21	2.85	214	10.25**	11.42	214	46.05***	36.58
レベル4	44	7.36	3.07	44	13.05***	13.85	44	46.59***	39.39

※(レベル1: <300元/月;レベル2:300~600元/月;レベル3:600~1200元/月;レベル4:>1200元/月)